特218
517

星代欽三著

竹林射法大意

始

特218
517

東京帝國大學弓術師範屋代鈕三著

的林射法大意

（第三版）

生弓會發行

はしがき

弓術は古來本邦に於て特長ある武藝として研究せられたれども、今日に至りては直接其の必要を見ざるを以て、唯、一部人士の間に修業、研究せらるゝに止まり、從つて其の特長を認め其の蘊奥を究めんとするもの尠きは誠に遺憾なりと云ふべし。甚しきに至りては單に遊戯の具となすものあるは最も歎ずべきなり。されど熟〻之れを稽ふれば、弓術は古來、武士道と終始せし特長ある技藝なるを以て、之れを學びて尚武の氣風を修め、剛健の精神を養ひ、沈著の意志を練り、且、優雅の動作に嫻ひて自己の向上に資するは、文弱、輕佻に流る る今日の社會狀態に在りては識者の當さに鼓吹、躬行に勗むべき所なり。換言すれば弓術は正心、養氣の術として現時に在りて充分の價値あるものなり。殊に之れを學ぶ者にして、思ひを我が國古代よりの弓矢の歴史に及ぼし、國體、

祖先を回想せば、我が大和民族の意氣を養ふ上に於て裨益する所決して尠少ならざるべし。

今や世は繁瑣に赴きて名利に趨り、腦力を費消する事益々多くして、身體の健康愈々沮碍せられ、思想また誠實を缺きて浮華に流れ、行動常に急燥にして莊重ならざる時に方りては、弓術の如き特長ある技藝を學びて此の弊風を打破し、以て自己を修養し人格の向上に資するは、何人も之れを勉むるの必要ありといふべし。人或はいふ、是れ必要のことなりと雖も些の閑暇なきを如何せんと。其の說誠に一理あるが如くなれども其の實は言を左右に託するに外ならざるなり。思ふに人の世に處するや識者は必らず趣味に生くるものにして、繁劇の間に在りても趣味に對する餘裕を存し多少の閑暇を作り得るものなり。此の少閑の時に於て趣味を弓術に寄せ、之れを學びて當面の慰安を得、併せて健康の保全と精神の修養とを圖り、以て漸次弓術の本領、蘊奧を研究せば蓋し無上

の樂みなりといふを得べし。故に余は今の時に方りて廣く此の弓術の趣味を世の紳士竝に青年諸氏に勸むるは、敢て無用の事にあらざるを信ずるものなり。

弓術の研究は維新以後に至り名人、達士の亡ぶると共に殆ど廢絶したるが、近時に至り假令其の趣意に於ては多少昔日と異る所ありとはいへ、稍〻隆興の氣運に向ひたるは洵に喜ぶべきことなり。然れども弓術を學ぶには先づ弓を引く方法と理論とを修めざるべからず。是れ師に就きて修むるに若くはなしと雖も、師を得る能はざる場合に在りては書に就きて反覆、玩味し、其の方法と理論とを會得し、以て其の修業に資せば進歩の度必らず速かなるものあらん。余之れを思ふこと久し。遂に淺學、寡聞を省みず茲に此の編あるに至れり。

本篇は主として初學者のために弓術を學ぶの方法を說きたるものにして、竹林派傳來の所說を基礎として往々新意を挿み、或は他の粹を拔き要を摘みたり。我が家の佛尊しの謗りと先輩に對する不遜の罪は固より免れざる所なれども、

世の弓術を修めんとするの士、幸に此の書に由りて弓術の規矩を窺ふことを得て、一意驀進、門に入り堂に上ると共に、益々其の道の蘊奥を研究し以て弓術の隆興を圖り、社會の紳士、青年をして洽く弓術の特長を知らしめ、體育と精神修養とに資するあらば、編者の望み足れり。

大正八年孟秋

屋代弘三

例言

一、本編は初學者のために編輯したるものにして、素より射術に關する梗概に過ぎずと雖も、射術の根源を明かにし、正路に因りて之れを導き、弓術を學ぶ者をして其の據る所を得せしめ、師なき場合にありても自修に便ならんことを勉めたり。

一、射術の要點は約して七道とすべし。故に七道の各項に於ては先づ射の方法を述べ、次に古來の說を揭げ、以て隨時、反省、咀嚼の資に供せり。

一、古來の所說の中には簡に失するあり、難に過ぐるあり、或は佛語等に託して其の說を高くせんとせるあり。茲には其の中に就きて解し易きものを擧げたり。之れ要なきが如くなれども他書を讀むの楷梯とならんことを思へばなり。

一、本編は日置流竹林派を主として多少新釋を試み、傍ら諸説を摘錄して參考に資し成るべく重複を避けたり。

一、本編は十五間の的を射るを標準として編輯したるものなれども、此の方法に由りて遠射を試むるも大なる差違あることなし。

一、本編は如上、射術の方法を講じ體育の一助たらしむると共に、本邦特有の尙武の氣風を養ひ各自精神の修養に裨補あらしめんとするにあり。

目次

第一章　弓術總説

其一　弓術の修業、　其二　修業の心得、　其三　五味、七道

第二章　七道の細説

其一　足踏、　其二　胴造、　其三　弓構、　其四　打起、　其五　引取、

其六　會、　其七　離附後の伸

第三章　弓術の諸説

其一　弓矢と弦（弦の收まり、矢の別れ、弓力、弓盛、弓計、弓拍子、弓の張顔、矢の根、相生相尅、五重十文字）、　其二　强弱と弓手、馬手（三ツの强弱、一騎

當千、大將)、　其三　手の裏、　其四　狙ひと的(雪の目付、一分三界、著已著界、拳中と心眼、的の見方、心の狙)、　其五　弓術の三要素
第四章　用　具
其一　弓、　其二　矢、　其三　鞲
第五章　來歷と射術
其一　弓術の由來、　其二　弓術の流派、　其三　歩射と騎射、　其四　五射、六科と眞行草

竹林射法大意

屋代鈆三著

第一章　弓術總說

其一　弓術の修業

弓矢は既に過去の武器となりて今の要具にあらず。從つて今の弓術は古昔と趣を異にし、單に遊技の一と見做し、若くは體育上に於ける運動の一方法となすもの多しといへども、之れ唯、皮相の見にして弓術の意味を解せず特色を知らざる者と云ふべし。蓋し弓術は啻に遊技とし若くは運動の一方法となし得る

のみならず、猶此の他に進退動作の優雅を學び又精神上に於ける修養をなし得べきものにして、弓術の眞味も特長も亦卽ち此に存するなり。

思ふに、我が國に於ての弓矢は神代より傳へ來り、往古に在りては國を治むる唯一の武器として用ひられ、中古に在りては朝廷の禮典として重んぜられ、武門の世となりては重要の禮式と定められ、又戰時の要具となりたると共に武士の生命となりたり。卽ち武家を弓矢の家といひ或は弓取と稱し、武道を弓矢の道と唱へ、又は弓馬槍劍と稱したるを見ても、當時弓矢の如何に重んぜられたるかを知るべく、從つて我が國の武士道なるものは古來弓矢と密接の關係を有し、相憑り相俟ちて發達し洗煉せられ來りしなりといふを得べし。故に弓矢を操る者は、啻に之れを遊技となさず又單に體育の上にのみ著目せず、廣く古來の傳說を考へ、剛毅、堅忍、莊重、沈著にして道義に篤き古武士の精神と高風とを學び、心を正し身を修め志を高くせざるべからず。若し夫れ之れを等閑

に附せんか、之れ弓術の尊重すべき所以と特色とを沒却するものといふべし。天下の寶も其の所を得ざれば瓦礫に同じ。弓術も亦其の人に依りて寶ともなるべく瓦礫ともなるべし。されば弓術を學ぶ者は其の技術を修むると共に、上述の如く精神の修養、陶冶に心懸け、每に之れを思ひて克く之れを修め、古武士の意氣、高風を學びて人格の向上に資し、傲慢、卑陋の心を起さざらんことを努め、進退、動作の莊重、優雅を心懸くべし。斯くの如く多年の間、誠心誠意を以て攷々として勗めて懈らずんば、遂に弓術の眞髓を會得し堂奧に臻るも難きにあらざるべし。

弓術は其の人の精神と至大の關係あるものなれば、精神を鍛錬するは最も緊要なる事なりとす。故に安齋隨筆にも射藝は心を練るを最も肝要となすと說けり。其の大要は「凡そ武藝は心を練るを肝要とす。中にも射藝は心を練るを至極とす。心躁げば氣躁ぎ脈躁ぎ總身躁ぎ狂ふが故に的に中ることなし」と云へ

り。洵に其の言の如くなるを以て、弓術を學ぶ者は其の技を磨くと共に其の精神を修養し、只管に的に中てんことのみを思はずして的より外れざらんことを心懸くるを緊要とす。若し的に中てんことのみを思ひて弓矢を操らば、精神の安靜を得ずして心氣躁ぎ却て的に遠ざかるは安齋隨筆にいへるが如し。殊に初學の者は、的に中てんことを思はずしてよく姿勢を整へ技倆を磨き最も精神を養ふを第一義とすべし。之れ自ら的より外れざらんことを心懸くるの趣旨に合するなり。蓋し的に中るは姿勢の整調と技倆の練熟と精神の修養とに得たるの結果なり。約言すれば、中りなるものは的に中てるにあらずして自ら中るべきものとす。故に自ら中るにあらざれば眞の的中と云ふ事を得ず。且、此の如くならざれば眞に弓術を學びたりと云ふを得ざるなり。若し唯中りのみを喜びて其の他を省みざるもの又は短日月の修業にて巧妙を誇らんとする者は、弓術の如き學ぶに難きものを棄てて學び易きものに就くに若かざるなり。古來、卷藁

三年と稱せり。卷藁にて稽古するのみにても猶此の年月を要するを謂へるなり。弓術修業の易からざるは之れによりても其の一斑を知るべきなり。殊に技術に熟練し精神を修養し事に臨んで悠揚として迫らざるは至難の業といふべし。往昔源平屋島に在りて勝敗を爭ひ、平氏は海に船を列ね源氏は陸に轡を駢べ數萬の軍兵目を側つるの間にあつて、那須與一宗高が波上ゆたかに駒を進め從容自若として遂に扇を射落し、軍の占形をして源氏に利あらしめし有樣は今猶目前に見る如く、誠に凛々として勇しく、弓術を修業、研磨する者の典型となすべきなり。

又支那にありては、古來、射は六藝の中に數へて尊重せられ、射は內、志正しく外、體直くして而して後中りを言ふべしと稱せられ、三千年の昔、周の時代にありても大射、賓射、燕射、鄕射等の禮を行はれたり。大射は天子が宗廟の祭祀に與かる人を選擇するために行ふものにして、先づ澤宮にて射を習はし

め後に射宮にて大射を行ひ、中りたる者は祭祀の典禮に與かることを得しめたり。故に射は德行を觀るべしといひ、又威德を觀る所以なりといひ、又父子、君臣各〻其の鵠となるべきものにて射は己の鵠を射るものなりとも唱へ、或は男子生るれば桑弧蓬矢にて天地四方を射る、天地四方は男子の事ある所なりと禮記射義等に見えたり。又射に就きて說きたるものの中に左の言あり。

射有レ似二君子一。失二諸正鵠一、反求二諸其身一。（中庸）

射者仁之道也。射求二正諸己一。己正而後發。發而不レ中、則不レ怨二勝レ己者一。反求二諸己一而已矣。（禮記射義）

君子無レ所レ爭。必也射乎。揖讓而升、下而飲。其爭也君子。（同上）

是れ等のことを考ふるも、弓術を學ぶ者は常に其の心を高尙にして其の行を正し每に己を省みるの要あるは、彼我同じくして今も昔に異らざるなり。

古來我が弓術書に草菅勝穀の喩へを設けて弓術を學ぶ者を戒むるも亦同じく

己を反省せしめんとするなり。即ち雜草の如き邪心、惡癖は輙もすれば蔓延し易きものにして、穀類の苗の如き良き種子を侵害せんとするを以て、常に省みて之れを除去するに努めざれば弓術修業の好果を得る事能はずと敎へたるなり。是れ誠に泥く〳〵味ふべき言にして、廣く之れを考ふれば啻に弓術のみならず萬事に通じても亦慮るべき敎へなりとす。

其二　修業の心得

弓を射るの目的は的に中つるにあり。故に的に中りたる時は例令運動を目的となすといへども、其の興味の生ずることの深きものあるは何人と雖も異る所なきなり。されば日に月に練習して的に中れば、譬へ獨習にても可なるが如くなれども、弓術は前に述ぶるが如く古昔、武藝の上位に置かれたるものにして、學ぶに難く又自ら其の術を學ぶに方法あるものなれば、眞に之れを學ばん

とする者は、其の方法に由りて基礎を鞏固にし練磨の功を積まざるべからず。所謂自己流にて練習し若くは一時の興に乘じて弓を弄ぶ者の如きは、克く中るといへども多くは漫然由る所なく唯其の腕力、才氣に乘じて手先の調子のみを以てし、精神も姿勢も伴はざること多きを以て久しく中りを保つ能はざるは當然のことなり。之れ基礎を作りて練磨の功を積める眞正の中りにあらざるが故なりといふべし。例令多少先輩の教を受けたるものなりといへども啻に的中のみを以て弓術の能事了れりとなすものは、的に中りて得意なるの日にありて必らず既に惡癖の萠芽を生じ、遂に中りは漸次に減じ、而して後惡癖の如何ともなす能はざるに至らん。甚しきは是に至りて懊惱の極、弓術を廢するものあり、洵に遺憾なりと云ふべし。然らば此の患なきを期するには如何せば可ならんか。曰く師に就きて射術の基礎を鞏固にするに若くはなし。

姿勢を作り心氣を整ふるは弓術の大本なり、基礎なり。鞏固なる信念も之れ

より生じ確實なる中りも之れより出づるなり。宛も堅牢なる家屋を建てんとするに方りては其の基礎工事を鞏固にし、大厦、高樓に於ては更に其の工事の嚴密なるを見るが如し。故に、弓術を學ぶ者にして將來人に勝らんとせば、殊に最初より大厦、高樓を建つるの覺悟を以て奮勵、邁進し、大本、基礎を鞏固にせざるべからず。而して此の基礎工事を嚴密にせんには、必ず師に就きて其の教を守り常に能く卷藁にて稽古し、姿勢に熟し、心氣を整へざるべからず。卷藁は基礎を作るものにして的に中つるの稽古をなすものにあらざるを以て、人或は其の無趣味と迂遠とを嗤ふものありといへども、弓術の基礎を作るには卷藁に若くものなきは古來の定論にして實驗上また必要のことたり。卷藁に於て稽古するは恰も圍碁を學ぶに定石を覺え、畫を習ふに運筆より入るが如し。故に從來の經驗に徵するも、多く的のみにて稽古したる者は惡癖に染み易く動もすれば邪道に陷れども、卷藁にて修業を怠らざるものは其の弊甚だ尠きのみなら

ず却て好果の見るべきものあり。故に初め的のみに由りて卷藁の迂を嗤ひしものは其の結果に於ては却て其の愚を笑はるべし。古語に云ふ、千里の行も一歩より始まると。今假りに其の出發點に於て毫釐の差ありとせんか、行を重ぬるに從ひて自ら方向を異にし、一は目的の地に達し得るも一は其の地に到る能はざるのみならず遂にまた千里の差を生ずるに至らん。戒むべきことにあらずや。

卷藁にて稽古するには必ず師に就きて弓の握り方、矢の發ち方、其の他總て弓矢を扱ふ方法より姿勢の正しきことを學ぶべし。頰を打ち、耳を拂ひ、左手を傷け、矢こぼれのために絃を切る等のことは、多くは弓矢の扱ひ惡きか若くは姿勢の正しからざるより起る事なれば、能く初めより之れが教導を受けて其の理をも會得し、姿勢を正しくし、更に心氣を整へ、悠々迫らざる態度を以て卷藁に對して射ることを努めざるべからず。

弓、矢、弦、韝の四具は相互の釣合及び修業の程度に依りて品質等の如何をも考へざるべからず。又精撰するの要あるなり。然れども初學者は弓の力の弱きものより始めて努めて姿勢を整ふべく、韝も柔き帽子より初むべし。技倆漸く熟するに隨ひて、次第に弓の力を強め又韝も漸次に固帽子となすを弓術修業の順序とし、興味も亦之れに伴ふものなり。一躍階上に飛上るが如きことをなすは害ありて反りて益なし。殊に力量を恃み、姿勢も未だ整はざるに自己の力より強き弓を引くは最も戒愼すべきなり。弓術の百病、百癖は強弓を引くより生ずる事甚だ多きは實際の上より見るも明かにして且、古人も既に說く所なりとす。

卷藁にて練習の傍ら的を射る事も興味を喚起する上に於て必要なり。今の弓術は古昔の修業と異り運動をなすを主眼とし娛樂の意をも含むものなれば、昔の人のいひたるが如く必らずしも卷藁三年の修業を强ひずして可なり。唯初めは卷藁の稽古を多くして的を射るを少くするは必要のことなりとす。之れ前に

も述べたるが如く、卷藁の稽古を怠れば確固たる姿勢定まらず又定まりたる姿勢も崩れ易きものなればなり。卷藁の稽古は之れを厭ふ人多しと雖も、克く其の味のある所を咀嚼すれば興味自から生じて的に對するよりも別に妙味の存するものあるを知るに至るべし。弓術を學ぶ者此に至りて初めて共に語るべき也。

的を射るに方りては精神を大にし、態度を豊かにし、唯、的に中てんことのみを思ふべからず。若し的に中てんことのみを思はば、不知不識の間に自ら精神は萎縮し技倆は退歩するものなり。故に的に中てんことを冀はずして的より外れざらん事を勉めざるべからず。之れ同じき事の如くなれども其の實際に於ては相反する結果を生ずるものなり。何となれば、的に中てん事のみを冀ふ時は的に心を奪はれ、其の結果として精神は萎縮し姿勢も亦崩るゝ事少からず。的より外れざらん事を勉むれば自ら精神を緊張せしめ姿勢を正しうし油斷あるべからず。之れ其の事の同じきが如くにして結果の異る所以なりとす。彼の圍碁をなすに方り勝たんと打つべからず、負けまじと打つべきなりといふに同じ。初學者に於ては最も心を用ふべき事なり。

中りは人に依りて異れども、多くの人は一張、一弛を免れざるものなり。猶、潮の滿干あるが如く、波の高低あるが如くにして、中りの續きたる後には反りて中らざることあり。俗に之を上り目と唱へ進歩の階梯なりとなすは洵に當然のことなりとす。思ふに、何事に依らず己の意の如くなるものにあらず。多少の困難を排除して進まずんば目的を達するを得ず。殊に其の修業に於て易からざる弓術にありては更に此の覺悟なかるべからず。弓術を學ぶ者、一、二年を經たる後に於て中りを失ひたるがために往々廢絶するものあるは惜むべきことなれども、畢竟此の覺悟と忍耐との足らざる故なり。若し此の如き人にして師の言を守り暫くの間、勉强、努力せば、其の中りも、必ず曩時に勝るものあるに至るは疑を容れざる所にして、上り目の稱あるも亦宜なりといふべし。

驕慢の心は最も戒慎すべし。凡そ人にして自信力あるは必要のことなれども、常に注意せざれば不知不識の間に増長して、いつか驕慢に變ずることあり。殊に弓術に於ては、姿勢未だ整はざるも相當の中りを得ることあるが爲に此の病を生ずること多し。故に自信力なるものは、弓術に於ては常に自らその幾分を減じて、自己の立場を定むるを穩當とす。換言すれば之れ自重の心なり、反省の心なり。自己を持することは宜しく穩雅、莊重なるべし。然らずして一たび驕慢の心を起さんか、精神は疎放となり、技術は進歩せざるべし。初學の人は中りを得ることあるが爲に往々之れを誤り、動もすれば此の病に罹り易し。譬へば、弓術を修むること一、二年にして盛に中る時あり、此の時に際し、他人より見れば姿勢も未だ整はず心氣も猶、充實せざれども自身は之れを知ることを得ず、唯、中りあるがために上手になりたりと思ひて、いつしか驕慢に陷り、誇りて改むることを知らざれば、技術の進歩を阻碍するのみならず、惡癖次第に生じて遂には矯正すること能はざるに至るべし。串柿流なりと惡口せらるゝに至るも是等より出づること少からず、注意すべきなり。然れども若し此の人、幸に早く之れを悟ることを得て、師の教へを守り自ら反省して驕慢を矯め、更に二、三年修業の後に於て顧ることあらんか、其の當時の心と技術とは實に額に汗するの思ひあるべし。要するに初めは自己の思想の卑きが爲に自己の缺點を知ること難きも、修業いよ〳〵深ければ思想從つて高く技術亦上達すると共に、自ら其の缺點を知るを得べきなり。之れ草菅勝穀の譬あるが如く、自ら深く戒め以て精神を修養せざるべからざる所以なり。精神を修むるを得ずして技倆の上達、巧妙ならんことを望むは、宛も木に緣りて魚を求むるが如きのみ。

弓術を學ぶ者は師に就くことを必要とするは前にも陳ぶるが如く、而も良師を擇ぶべきなり。昔の人の云ひしが如く人は生れながらにして道を知る者にあらず。師に就かずして其の道の名人、達士と稱せらるゝものはあらざるなり。

喩へば工人の業と雖も猶且、師を求め多年修業の功を積みて後始めて成るを得るなり。殊に弓術の如き學ぶに難く且、往々惡癖の生ずるものは師に就かずんば決して成功を期する能はざるなり。而して其の師は技術の人たると共に人格の人たるを要するは亦言を俟たざるなり。師と仰ぐべき人の性格は其の道を學ぶ者に大なる感化を與ふるものなればなり。昔より曰ふ、朱に交れば赤しと、師に於て殊に此の感の深きを見る。

弓術を學ぶに就きて心得べきことは上來述べ來りたるが如くなれども、更に其の要を摘みて云へば、常に誠心、誠意を以て射に臨むべく、言動をして輕躁ならしむる勿れ、身心をして剛健ならしむべく而も精神は安靜なるを要し最も品位を養ふべし。斯くの如くして又之れを總ぶるに忠實、周緻の心を以てし奮勵、努力せば其の進歩の駸々たるものあらん。

其三、五味、七道

弓術を學ぶべきものの心得べきことに、五味（ごみ）、七道といひて射を學ぶ上に於ての規矩となるべきものあるなり。

五味とは心氣の活用に屬するものにて卽ち目付（めつけ）、引込、伸合、離、見込の五つをいふものにして、此の五ケ所に於ける心氣の働きの味ひなり。目付とは的とすべきものの視方をいひ、引込とは弓を引込む際に於ける左右の釣合をいひ、伸合とは左手、右手萎縮せずして心氣、筋骨も共に伸暢するを稱し、離とは伸合て矢を發するに法あるをいふ。見込とは矢の離れたる後の姿勢と心の働きとの味をいへり。見込は又一に後の伸ともいふ。而して是れ等心氣の働きは自ら七道と關聯するものなれば七道に於て說く所あれども、初學の士にありては容易に其の味を解する能はざるべし。然れども漸次弓術を學び其の技の上達する

と共に其の味を會得し來り、且、其の味は修業の年月を積むに從ひて益〻妙味を感じて止まる所なく、深く學べば學ぶ程興味も亦津々として際涯なきものなり。されば弓術は一生の修業なりといふも敢て過言にあらざるなり。

七道とは弓を射るの姿勢、射形に屬し射術の要項にして、足踏、胴造、弓構打起、引取、會、離の七つなりとす。是れ卽ち弓を學ぶ者のために七ヶ所の規矩を示したる名稱にして技術に屬し、射術の基礎となるものなり。弓術を學ぶ者にして若し之れを忽せにせんか、恰も礎石なくして家を建て又は浮萍の水上に在るが如きのみ。年を積みて弓術を學ぶも少しも得る所なく、決して巧妙の域に達する能はざるなり。故に弓術を學ぶ者は能く七道を修めて五味を會得し、常に其の姿勢を頽さずして心氣をして潑溂たらしむべきなり。

以上の五味、七道は之れを言ふは容易なれども之れを行ふは甚だ難し。思ふに弓術は古來武藝の最たるものにして所謂藝術なり。故によく其の理は解し得るといへども之れを術に行ひ得ざれば少しも詮なし。理は解し易くして術は施し難し。是を以て弓術を學ぶには初めは寧ろ其の技術を主として理論を從とするを可とす。初めより理論にのみ走りて手腕の足らざるは考ふべきことなり。技術上達するに至らば從つて其の理論を行ふを得べく、技術と理論と相伴うて

始めて射術の巧妙を見るべく又其の尊さを増すべし。しかも技術は速成の道なく、何人と雖も相當の年月を要し短日月の間にては到底其の上達を期する能はざるものなれば、初めより良師に就きて克く其の指導を守り、みだりに他人の說に迷はず、錬磨を重ね、研究に研究を積みて而して後巧妙の域に到達すべきなり。弓術を學ぶ者常に之れを思はざるべからざるなり。各流、各派に於ける理論、技術の長短、得失を稽へて取捨する等の事は初學者の爲し得べきことにあらず。其の師の流派を學び得ての後に於て爲すべし。

以下說く所のものは弓術を學ぶの梗概に過ぎずと雖も、心氣の活用を示し、射術の方法を講ずるものにして、古來弓術に關して費せる所の千萬言も亦此の外に出でざるなり。故に說く所甚だ簡略なりと雖も、之れを讀む者は匆々看過することなくして能く其の主意の存する所を考へ、攷々として怠ることなくんば遂に之れを心に得て術に行ふ事を得べきなり。

第二章　七道の細說

其一　足踏（あしぶみ）

足踏は七道の始めにして弓を射んとする者弓を左手に矢を右手に持ちて射場に立たば先づ確實に足踏をなすを肝要とす。此の足の踏み方は八文字ともいひて、自身より見て外の方へ八の字の形の如く踏み占むるなり。譬へば十間の扇を七八間開きたる程の形に八文字に踏むものにして、古來之れを扇の地紙又は地縄と稱へ來れり。左右の足のなす角度は凡そ六十度位にすべく、其の足踏の廣さは古より凡そ其の人の矢束位となすべきものと敎へ來りたれども、時に應じ、目當（或は目中とも書す）卽ち的に對して其の宜しきを計るべきなり。今之れを分り易く云へば、足踏したる踵と踵との距離は其の人によりて差あれども、二足の

長さ乃至三足の長さ位となすべきなり。

古來蜘蛛の曲尺（曲尺とは規矩といふ義なり）といひ、闇夜の曲尺ともいひ來りたるは此の處のことなり。蜘蛛の曲尺とは蜘蛛が其の巣を作るに風を竢ちて思ふ目當の所へ吹きつけられて絲を懸くるが如く、的より假りに自分の立てる處へ一線を引

きて其の線に左足の拇指の端と右足の拇指の附根とを當てて八文字の足踏をなすことなり。此の足踏を扇の曲尺と云ふ。又的との距離を計り見るにも蜘蛛の曲尺の語を當てたり。闇夜の曲尺も蜘蛛の曲尺と意味略ぼ同じく、闇夜に音を聞きて直ちに目當を定め又は距離を測るべしと云ふ事なり。

其二　胴造（づくり）

既に足踏をなし了らば胴造をなすべきものにして、此の足踏、胴造は七道の基礎となるものなり。而して胴造をなすには既に作りたる扇の地紙の形なる足踏に上體を重ぬる心を以て立つべし。即ち左右の足の裏は地に粘著する如く力を全體に保ち、兩膝は後ろへ反らして力を内方へ寄すべく、腹部は前に落し、腰部は反らして袴の腰板は脊骨につくやうに立ち、臍下丹田に氣を納め力を保たしむれば自ら上體は地紙の形の上に重なるべきなり。

以上の如くなしたる後は腰より上の體の据ゑ方は如何にせば可ならんかと云へば、其の位置は眞直にして中央に据うべきなり。即ち正面より見れば十文字の曲尺に當る位置にあるをよしとし、側面より見れば胸の前に出でざる程にすべく、即ち腹部以上垂直なるべし。五身（ごしん）といひ或は五胴と云ふも此の體の据ゑ方を說く言葉なり。

十文字の曲尺とは體を据ゑたる竪の中心は十といふ文字の竪にて中分し得る程に左右何れにも片寄らざる位置にあるべく、兩肩は十といふ文字の横の如く何れも高低なくして水平なるをよしとす。

五身（或は五胴と云ふ）とは體の据ゑ所五つありと云ふ義なり。即ち左手の方へかゝるあり、右手の方へ退（の）くあり、前へ伏すあり、後ろへ反るあり、中央にあるの五つにして、此の內何れをよしとするかといへば、中央に體を据ゑるを最も宜しとすと云ふことなり。而して又特に注意すべきことは、此の時に作りたる上體、足部、腰部等の力は射の最後なる殘身といひ又は後の伸合といふ所に關すること大なるものあるが故に、之れより後に行ふ處の弓構、打起、引取、會、離等に於ては前述の如く作り成したる姿勢と力とを失はざるやうに充分に注意せざるべからず。

古來、日月身（にちがつしん）、大日（だいにち）の曲尺（かね）と云ふも此にあり。之れ我が身は日月の如くなり、大日如來（密敎の本尊にして日の別名なり又一切諸佛の王なりといふ）の如くなり

胴造

と思ひて、泰然として我が心を動かさず、悠揚として我が體を据ゑ、七情（喜、

怒、憂、思、悲、恐、驚）の氣を去り、筋骨を緩やかに延ばし、豐かに氣高く立つをよしとすと敎へたり。さればとて傲慢なる態度をなすべしといふにはあらず、よく〳〵心すべき事なり。

眞の鞍の曲尺とは馬術の語を借り來りたる名にして、體の据ゑ方を敎へたるなり。卽ち馬上に置きたる鞍の中央に悠然として落附き、體は左右に沈めて悠悠自若たるべしといふ義なり。

要するに善く射んとするものは先づ心を落附け、體を豐かにし、人に怖れず、弓に負けず、的に奪はれざるを以て第一の要素とす。日月身、大日の曲尺、眞の鞍の曲尺等の語を以て敎へ來りたるも、蓋し此の心を養ふことを敎ふるに外ならざるなり。

其三　弓構

弓構は胴造をなしたる後に矢を番へ姿勢を整ふる時をいふなり。卽ち左手に持つ所の弓は本弭を左の膝頭に立て、右の手は矢を持ちたるまゝにて弦を己の前に廻し、弦の外より鏃を左の手に挿ましめて矢を番ふなり。矢を番ふ位置は弓の方は握の上部の矢摺籐にかけ、弦の方は筈と弦と直角になる所より二、三分位上に懸くるをよしとし、常に此の二ヶ處の位置を更へざるやうにすべし。若し矢を番ふる毎に此の位置を更ふれば、大いに中りに障るものなり。構へ方は圓き物を抱く心持にて左右の手を圓く悠然として構ふべし。卽ち弓手、馬手も相對して左右の拳弛みなく輕く弓をとり矢先は體にならびて的に向ふべし。此の際に於ける肩の位置は右肩よりも左肩を少しく低下するの心なかるべからず。初學の人は動もすれば左肩の高くなるものなれば此所にて之れを制せざるべからず。弓手にて弓を握るには四本の指は弛みたるみなきやうにし、餘り上押となすべからず、殊に平押とならぬことを注意し、弓を拇指と人差指との股

(大胯といふ)にて承くべし。而して此の時に於ては體の浮かざることを努め腹部、足部の力の空虚とならざるやうに注意せざるべからず。

馬手の韝は弦と十文字となりて、人差指の根と懸口をせくやうに狹くとるべく、拇指は成るべく節より曲げざるをよしとす。柔き薄革の韝なれば弦は拇指の中節にかけ人差指にて矢の筈を輕く抑へるべし。弦搦(つるがらみ)は三ッ韝なれば人差指と中指とにて確と弦をからむべく、四ッ韝は之れに準じて知るべし。

弓構

淺深(せんしん)とは弦のかけ方なり。淺とは拇指の中節に弦を懸くる事なり。之れ薄革の韝などに用ふ。深とは拇指の根本に懸くる事なり。三ッ韝、四ッ韝に用ゆるなり。

弦計(つるはかり)とは韝を弦にかくるに方りて無理なきやうにすべきをいふ。即ち弦の力にさはらぬやうにかけて、弦と韝の力と互に張合はぬ味と和らかなる釣合とを保つやうにして弦の力を育つべしといふことなり。此の事は引取より會、離に在りても常に注意せざれば正當の中りを得んこと難かるべし。

弓手の拳は上筋押(上押)も弱し、居付(下押(したおし))も弱し、反(そ)る(入過ぎ)も弱し、まぐるゝ(控へ過ぎ)も弱しといひて、唯中筋に押し拇指の根へ中指の爪先の著くやうにし、拇指は中指にかけ拇指の根元にて弓を押すやうにすべし。而して手(て)の裏(うら)の形は成るべく小さく見ゆるやうに指と指の間の隙かざるやうに弓を握るべきなり。之れ弓構の時のみならず手の裏の形は斯くの如く心得べきことな

りとす。

定惠善（ちやうゑぜん）といふことあり。三指の口傳ともいひて弓手の手の裏のことを云ふなり。定とは拇指をいひ、惠とは人差指をいひ、善とは中指のことを云ふ。拇指にてよく中指を抑へ、拇指、中指共に弓の内竹（うちだけ）、外竹（とだけ）の角々に當りて法則にはまるべきものなれども、人差指は唯前に出せばよきなり。また此の外の薬指と小指は中指と同じ形にて弓を握ればよきなり。小指には殊に力を入れずとも相當の力あればよきなり。吉田流にては弓を握るに紅葉重（もみぢがさね）の手の内（うち）と稱して、弓を小指よりしめあぐるをよしとなし又之れを爪揃（つまぞろへ）と唱へたり。要するに左手の拳は前述の如く成るべく散漫ならずして小さく締りて見ゆるやうにすべきなり。

其四　打起（うちおこし）

弓構の次を打起となす。打起は正面になしたる弓構を其の儘正面に打上ることにして重きものを捧ぐる心あるべし。故に先づ弓を打起さんとする時顔を的に向けて（物見とも云ふ）徐ろに弓を正面に擡げて、兩手の拳は頭より高く揚げて、其の位置は頭に近き所に置くべく餘り遠きに置くべからず。而して此の時に當りて最も注意すべきことは、此の打起をなすと共に、左右の肩と足踏、胴造等の浮動せぬやうに心すべきことなり。之れやゝもすれば浮動し易きを以て此の注意の要あるなり。然らば如何にせば可ならんかといへば、即ち左肩は低くするを努め、また左右の肩は後ろに退かざるやうにし、首は前方に出ぬやうにし、弓は上へ上ぐると共に體は下へ殘り沈むが如き心持とし、更に臍下の力の空虛とならざるやうにして打起をなすべき也。

打起の際に於ける弓の位置は必ず上體（胴の姿勢）と並行して相副はざるべからず。即ち上體の伏すものは弓も亦伏すべく、垂直のものは弓も亦垂直なるべ

し。若し上體垂直のものにして弓を伏せんか、會に至りて充分引込むこと能はざる事あり、注意肝要なりとす。

左右の肩は打起の際寧ろ前に出づるの姿勢とし後ろに逃げざるやうに注意すべし。但し其の人に依りて差異ありと知るべし。

打起

猿臂の射といふ事あり。昔、猿が藤蔓を腕にまとひ之れに木片をかけ矢となして飛ばしたる事ありと云ふより出でたる語にして、肩の弱みを嫌ひ左右の手の働きを充分になすの射様を喩へたる語なり。畢竟、弓を射るに方りて伸びを附けん爲の教にして、尺蠖の如く延ぶる前に屈し、屈して後延ぶるを教へたるなり。之れ此の打起の時より心すべき事なりとす。

其五　引取

引取は正面に打起したる位置を左へ旋らして、弓手は弓を押して斜に左の方へ押しやり、其の拳は的の右上に置き、肱のあたりの上より的を見るべく、馬手は打起の際の肱の位置をかへず、肱を軸として肱にてこらへ、肱より先だけ左へ曲げつゝ、額の前方へ拳を引つけて、矢束の三分の一位引くべきなり。此の構を父母大三といひ又中力ともいひて、之れより弓を押し弦を引きつつ會に至るまでを引取といふなり。而して引取に方りては力と精神と相倶に少しも弛み撓みなく、左手、右手、左肩、右肩等程よく張合ひて平衡を保ち、早からず遲からず、ゆる〳〵と會に至るべきものとす。會に至るに方りても左手、右手共に遲速なく同時に納まるやうにすべし。若し同時に納まらざる時は左右の平

衡を保つこと能はざるに至るべし。

顔を的へ向けてよりは弓の左側より的を見るべく、眼は右眼を主として左眼は添ふるのみとし、的の中心を見て的全體を見ざるやうに常に修業すべし。又一旦、的を見たる眼は決して他へ移すべからず。之れは離及び離の後の伸合の際に至るまで肝要とする所なればなり。

又引取の時には首の据ゑ方と的の視方に注意せざるべからず。即ち首は戻らず、傾かず、俯さず、仰向かざるやうにし、眞直に左側を向きて的に面すべし。言ひ換ふれば首は眞直にして左肩の上にある心持あるべし。此の如くにして的を見るの眼の位置も從つて定まるを以て、的は弓の左側弓手の上より見るべきものとす。

父母大三とは古よりの語にして弓手を父（或は剛とも いふ）に喩へ、馬手を母に喩へ、矢を子に喩ふ。大三とは押大目（弓手）引三分一（三分の一引たる處）といふことなり。即ち

矢束の三分一を引く處にして之を略して父母大三といひ來りしなり。歌にいふ處の「剛は父かけは母なり矢は子なり片おもひして子は育つまじ」と、其の意能く味ふべきなり。又大三の事を中力ともいひ、一般にこの言葉を用うる場合多し。

中力に於ては左手の拳、左肘の力及び腕の具合並びに馬手の拳及び右肘の力は如何なりやを考へて各〻其の宜しきを計り、又左肩の低下、右肩の据ゑ方並びに胸、腹等に於ける各部の樣子をも考慮し、而して後に弓手は斜に弓を押し下げ、馬手は肩と肘の力のみにて右拳に力を入れざるやう引取るべく、此の際、馬手の肘は成るべく背後に廻し

て引込むべきなり。此の如く引取るに方りても左拳、右拳同時に的と右肩に收まるやうにして何れにも遲速あるべからず。若し遲速ある時は、爲に釣合を失ひて往々片離れなどを起すことあるものなり。

中力より引込みつゝ會に至るまでは、前にも述べたる如く、重要の處なれば極めて丁重にし輕卒になすべからず。卽ち中力は既になし來りたる足踏、胴造、打起等の活殺に關し、又會、離、殘身等の善惡、死活も一に此の中力にて定まるものなればなり。されば更に重複を厭はずして聊か其の方法を述べん。中力に方りては左手の拳は前述の如く過不及なき位置を保ち、腕首の內側に於ける筋(剛弱處)は弛みを有し、肱の關節は反るが如くにし、左手全體の筋を緊張して弓を押しかけ左肩の低下に注意すべし。若し此處にて左肩に注意せざれば往々左肩の高くなる病癖を起すことあり。又右手の拳は弓と矢を支ふるのみにして腕首に力を保たしめず、右肩は後ろに退かざるやうにし、右の肘は成るべく

前に出でざるやうにし、而して後肩と肘とにて引取るべく、又胸の力は挫けざるやうにし下腹の力は空虛とならざるやう注意すべきなり。斯の如くせば弓手、馬手の釣合よく會に至るを得べし。射法本紀にも「引以身氣不以手力」といへるは此の引取のことをいふなり、味ふべき言葉なりとす。又求身抄に曰ふ「弓を引く時は臂に力を入れて臂にて引くべし手首にて引くは惡し引く時臂尻を段〻に下げて背の方へ引廻せば矢束よく引かるゝなり臂尻の立つは惡し」と。要を得たる言といふべし。

中力は一時力を休むる處若くは休む形となる所なりと思ふは大なる謬なり。中力は前陳の如く緊要の所にして左手、右手の力を働かしめ、且、全體に於ける釣合を考へ、若し惡き處あれば此處にて直すを得べきなり。惡き處あらば中力にては直し得るも、引込みたる後の會に至りては直すこ

と能はざるを以て殊に此處を肝要とする所以なり。

烏兎の梯とは中力の際をいふ。即ち烏は弓拳なり、父なりとして弓手を稱し、兎は懸拳なり、母なりとして馬手を稱し、此の烏兎の間に矢の水平にかゝるを以て之れを梯といひ又子にたとへたるは前述の「剛は父」の歌にいへる如し。而して之れを左右に引渡すには左手と右手と力の釣合ふやうにし、弓手は肩より拳に至るまで相當に力を保ち、馬手は肩及び肘の力の撓まざるやうにすべく、而も手首、懸（右手のことなり、以下同じ）に力を保たしむべからざるは中力の條に述ぶるが如し。又その引渡す形は二度の反り橋といひて、馬手は急に斜に引込まずして靜かに圓形に引取りて右肩に收むべきなり。歌に「打渡す烏兎の梯すぐなれや引渡すには反橋ぞよき」といふことあり、能く〳〵心すべきなり。又此の引取は他の流派にては虹形にせよともいひ若くは大鳥の羽をひろげて下るが如くせよともいふ。之れ亦同じ心にして工夫專一なりとす。

弦を押し弓を引くと云ひ來りたることあり。弦を押すとは弦を引込む時は弓を押すことを忘るべからず、弓を引くとは矢を引くと心得ざるやうにせよといふことなりと敎へたり。

其六　會

會の字は古は「カケ」と讀みたることあれども、今是處には中力より以後弓を引收めし時より保ちつゝある時を會といひ或は抱といふ。流派によりては之れを持といふ。蓋し何れにしても持滿の時を云ふなり。今假りに弓を人の一生に喩ふれば、足踏、胴造より引取迄は過去なり、會は現在なり、離は末期なり、殘身は未來なり。人の愛著は猶此の會と離の如し、故に之れを會者定離に喩へて會といひ離といひたるなりと。之れ昔よりいひ傳へ來れる語なり。

會に入りたる時に當りてはユッタリとして惣體の力緩まずして緊張し、兩肩

胛骨の中間にも亦力を通じ、胸の力は張りて左右の手と體とは寧ろ背後に彎曲するが如き心持あるべし。即ち左手、右手、肩、胸、腰、腹等の各部充分に緊張するをよしとし、最も萎縮するを忌むなり。持滿の二字はよく意を盡したる文字にして此の間の消息を語るものといふべし。

會に入りし時、即ち引收めたる時の弓手、馬手及び左右の肩は共に高低なく落ちつきて互に偏らざるやうにすべきなり。初學の人は往々此の時に於て右の肘及び右の肩の力の盡きんとすることあり、大いに注意すべきなり。之れ引取にも云へる如く左手(父)右手(母)相和合し權衡を保ちて同時に引き納むべし、父母の收まりともいふは即ち此れなり。引收めたる後は弓手にては弓を押しかけ、馬手は肘の力を張ることを忘るべからず。弓を身に知らせよといふことあり、換言すれば弓を己が身に引附け、身を弓と弦の間に割り込むやうにせよといふことなり。此の如くすれば弓の力は却て我が力となすを得て、弓の力のために我が力を殺がるゝことなきなり。

弦計(つるはかり)といふことは韘の方に屬し、韘と弦と互に張合うて矢に障りを起すことなきやうに弦計にて射る心にて保つべし。前にも云へる如く弓構の時より此の注意を要し、會の時に至りては更に之れを考慮せざるべからず。

日裏(ひのうら)、日表(ひのおもて)と云ふことあり。之れ右拳の收り方をいへるなり。日裏とは平附(ひらづけ)となりて手の甲の前へ向く形となることなり。日表は少しく捻りたる形にして手の甲の上に向きて收まるをいふなり。的前には日表を好み指矢前には日裏をよしとす。

寢々小法師とは引收めてより離までの會の抱への味をいふことにして、母親が幼兒を抱きて育つるに喩へたるなり。卽ち母が幼兒を抱く時には强く抱けば幼兒は窮屈に堪へずして能く寢ねず、若し又ゆるく抱けば墜すの恐れあり。故に其の子の寢心地よきやうに無理なくゆつたりと抱くを此の抱の位に喩へたるなり。

會は射學正宗にいふ處の彀なり。「彀とは箭を引きて弓弛の中間に至るの謂なり」と解釋せるにて知るべし。卽ち充分に引込みたる時をいふなり。この彀法中に「體勢反りて後ろに朝するを覺ゆ」といふ語あり。之れ前にもいへる左右の手と體とは寧ろ背後に彎曲するの心持あるべしといふに同じくして會の姿勢を穿ち得たるの語なりといふべし。また「彀は矢を發して遠く至らしむるの本にして的に中るの本にあらず」「前肩の下捲は彀の根本なり」と說く所亦洵に所以ある言にして考慮すべきことなりといふべし。

射法本紀には「持以無爲不以意爲」と說きたり。卽ち會に於ける動作と心の働きとをいひたるものにして、無理なきを尊び、殊更に爲さんとするを戒めたるなり、是れ亦思ふべし。されど一面より見れば、之れ修業上に於ける最後の到著點にして初學者の爲し得べきことにあらず。初學のものは斯くの如く爲すべきことを修業するものなれば、これ等の語は相當の修業、熟練を經たる後に當て嵌まるべきものなることを知るべきなり。

其七　離　附後の伸

離は會の氣充分に滿ち伸び合ひて離るゝをよしとす。卽ち弓一代（足踏以後離までを人の一代に喩ふ）の大事といふのは離のことをいふなり。初學者は成るべく矢、弦等に無理なく逆はぬやうに離すに努め、漸次修業の功を積みて後は弓手、馬手、肩、胸、腹に自然に伸びて强く輕く一氣に離るゝを心懸くべし。換言すれば離すにあら

ずして、會の機漸く熟し、筋肉伸暢し、心氣また充實して離るゝを尊ぶなり。心氣の靜平、沈著と渾身の勇氣とは實に此にありといふべし。

離は七道の中最も肝要なるものにして、足踏より以後に於ける樣々の苦心も一に此の離を能くし完全ならしめ、中りを育てんために外ならず。中り外れも一に離の善惡より起るが故に、會と離にありては努めて各部の力を張りて萎縮せしめず、身を浮動することなくして出來得る限り落附け、心を靜平に保ち、速からず、遲からず、無理なく、力ありて、輕くさえて放るゝをよしとす。

五味の中の伸合といふことは、時機より云へば離るゝ前に於ける心持にして最も重要のことなりとす。畢竟、精神を靜平にして全身に意を注ぎ、從つて身體の各部は漸次に伸びて離るゝを最善とす。後に記す所の五部の詰はよく此の伸合の方法を說明したるものなり。或は之れを伸と稱し特に一項目として說明する流派のあるにても緊要の事たるを推知すべきなり。

汰流といふことあり。淺き器に水を入れてこぼれざるやうに保つことは、恰も離の前に當りて左右平均に力を保持するが如きをいひ、又此の水をこぼすに當りては、急に一方に傾斜して瀉下するが如く思ひ切りよく離すべきなりと。

是れ、蓋し離に於ては澁滯し若くは偏倚する所なく力はよく平衡を保ちて、胸より左右に平等に別るゝをよしとす。言を換へて云へば、心に執著あるがために意念、勇氣を挫折せしめ、從つて左右の力を何れかに偏せしむる等の事あるべからずと云ふにあり。

離は無理なく輕くさえて離るゝをよしとすと雖も、其の離れ方に四つあり。

四つの離とは一に切りて離す離あり、二に拂ふ離あり、三に別るゝ離あり、四に左右相つのりて離るゝ離あり、此れ等の離は皆一部に偏するものなれば此の四つの離の和合して離るゝをよしとす。猶、鸚鵡の離に此の四つの離の融合したるを最善の離となすと傳へたり。鸚鵡の離とは、身體の各部調ひて左右相應じたる至極せる離を云ふなり。

雨露利の離とは其の字に示す如く雨又は露が草木の葉に宿り、集積して遂には雫となりて、葉末より自然に落つる有様を形容し、賞美したるものにして、會の力の蓄積、緊張して無理なく自然に離るゝこと此の如くなれと敎へたるなり。無念無想の離といひ無我の離といふもほゞ同意味なりとす。

五部の詰とは離に於ける最も重要なる事にして五ヶ所の詰といふことなり。詰とは意氣、力量俱に撓みなく緊張して伸びのある謂ひなり。五部の詰は卽ち總身にて伸びることなり。之れ一朝一夕に行ひ得るものにあらず、錬磨、研究

の結果にあらざれば行ひがたき業なりと雖も、此の技倆なくんば、たとへ、的に能く中ると雖も弓術に活氣なくして、遂に其の術、萎縮して死弓となるの恐れあるべし。能く〳〵思ひて常に之れを學び巧妙の域に到達せんことを心懸くべきなり。

陰の詰（臂力の詰）
胸の詰（右肩の詰）
陽の詰（重の詰又は延といふ）
（左肩の詰）
（剛の詰）

五部の詰は卽ち此の五ヶ所の詰にして各部に伸びあるを要す

五部の詰にして自然によく行ふことを得るに至らば、求めずしてよき離も出づべく、且、離れて後に於ける殘身は自ら伸を生じて强く力あるべく、從つて身體の位置は確固不動にして筋骨は緩みなく姿勢は立派にして人々をして感歎せしむるに至るべし。

五緩（ごくわん）と云ふことあり。卽ち五部の詰の反對となるものにして、離の時に於て

緊(しま)るにあらずして却てゆるむことを云ふなり。一には押手の腕首にて緩むを剛の緩といひ、二には右手の肱にて緩むを懸の緩といひ、三には押手の肩にてゆるむを左肩の緩といひ、四には懸の肩にて緩むを右肩の緩といひ、五には胸にて緩むを胸の緩といふ。是れ等皆萎縮するの根本にして甚だ忌むべきことなれば、常に思ふて之を戒め萬一此の如き傾向あらばつとめて直すべきなり。

六凶(ろくきう)の離あり。卽ち離に於ける惡きこと六つを指すものにして退、寄、上、落、送、修羅の六つなり。之れを說明すれば、退は矢束を引くにもあらず、詰るにもあらず、唯求めて左右の拳の力のみにて離し、其の姿勢は前釣合となりて少しも胸の活用なくして其の身は後ろへ逃げる形となるをいふ。寄は離るゝ時に方りて矢束短く戻りて離るゝをいふ。之れを緩み離とも云ふ。上は肩より上へ指を開きて離すをいふ。落は肩より低く落ちて離すをいふ。送は右拳が引出されて離るゝをいふ。修羅とは持の心にて離れ兼ねたる所を無理に强く射んとし荒くなりて規矩に外れて離すをいふ。此の六つの離は何れも惡しき離にして、雨露利の離の如く又五部の詰の如く離るゝにあらずして離を弓に知らせたる離なり。畢竟、意氣の充實して離るゝにあらずして、離さんとして離す離なり。要するに離の惡き癖一たび附く時は、兎角直すに六ヶ敷ものなれば努めて癖の出でざるやうに修業すべく、殊に初學の人は是れ等の癖の出でざるやう大きく離すをよしとす。

離を弓に知らしめざることの肝要なるは前述の如し。卽ち、會に於ていへる如く弓を身に知らせて、離は弓に知らしめざるをよしとす。離を弓に知らしむることは卽ち持滿の末に發するにあらずして自ら切り離さんとするなり。自ら切り離さんとすれば必ず離れ惡しくなるべし。離れ惡しければ自然に的に中らざるなり。故に此の心なきやうに常に修業すべしといふことなり。射法本紀に「切以(ルニテシテ)自期(ヲ)不(ル)以(テセ)吾意(ヲ)」といへると同意味なり。

射學正宗に勻、輕、注の三法を說きて離を重視せり。之れ前述の意と符合するものにして中りは此の離にあるを以てなり。支那も日本も離を重視することは之れを以て知るべきなり。其の說く所の大要を擧ぐれば「勻とは前後の肩、臂分勻して開くの謂なり。胸前肉開きて背後肉緊るもの此れなり。輕とは後拳必ず筋力を以て緊收して前掌と相應じ輕菘にして矢を發つなり。蜻蜓水に點して輕揚、活潑なるが如く、瓜熟し蔕落ちて天然に出づるが如くなるべし。注とは目力、凝注し精神聚りて分れざるの謂なり。故に矢を發つ時目力必ず一塊に凝注し目注ぎて心至り、意至り、手至り發して中らざるなし」と說きたり。其の言ふ所簡なりと雖も其の意のある所深く皆前述の意と同じきなり。弓術を學ぶ者はまた是れ等の語をも咀嚼、翫味せば得る所鮮なからざるべし。

附　後の伸

後の伸とは離の後の姿勢をいひたるものにして、又之れを殘身といひ或は見込ともいふ。細かに云へば是れ卽ち離れて後の心、形、力をいふものなり。畢竟、五部の詰を行ひ得ば離れて後の伸ありて姿勢も動かず、且、力を保ち得て立派に見ゆべきものなりとす。之れに反し離るゝと共に精神、空虛となり、また餘力なくんば求めんと欲するも後の伸を求むるを得ず、姿勢崩れて洵に見苦しきものなり。後の伸を心懸くるの人にして若し後者の如き射形の人の射を見る時あらんか、必ず思ひ半に過ぐるものあらん。有終の美をなすは弓術に於ても亦忘るべからざることにして、且、重んずべきことなれば常に後の伸の注意を怠るべからず。

第三章　弓術の諸説

其一　弓矢と弦

弦の收り

弦の收りとは弓を引取りて會に至りたる時、弦はよく胸につくをよしとす。人の骨格によりて多少弦の收り方を異にすれども、要するに引收めたる弦は斜によく胸につくべきものなりとす。

矢の別れ

矢が弦を離れて飛び行き方の善惡をいふ。卽ち鏃に注意して引き收め、離に方りて弦さわぎなきやうに離るれば矢飛び必ずよき也。

弓力

弓力とは弓の力を選ぶをいふなり。弓は我力に相應したるを用ふべきものにして餘りに强き弓を好む事なかれ、といふことを敎へたるなり。畢竟、我が力に相應せざる强き弓を引きたるがため姿勢を崩し、又は早氣の病を起すなど往々あることなれば注意すべきなり。

弓盛

弓盛とは技倆の盛なるをもいひ又弓の盛んなるをもいふなり。卽ち持滿の際、氣力、筋骨挫けず、釣合の盛なる處にて見事に離るゝをいふことなれども、之れ技倆のみならず弓にも依ることなり。されば如何なるものをよしとするかといへば、新弓も惡しく、多く射たるも惡し、射馴れたる弓の力の盛なる弓をよしとす。

弓計

弓計とは弓の呀えをいふなり。卽ち引收めて釣合ふ時に手の裏握りつめずし

て弓におさせ、手の裏にて弓をしかと請け留めて挫けず、能く右手と和合して離れ、弓ばかり返る心持にて手の裏へ響かず、輕く弓返をして納るをいふなり。

弓拍子

弓拍子とは離に於ける弓の拍子の善惡は弓と矢と弦の釣合にあるをいふなり。强き弓に細き矢を用ひ、弱き弓に太き弦を用ふるの類の釣合惡しき道具は用ふべからず。之れ弓拍子の出でぬものなればなり。又弓の張顔に依りても善惡の拍子あるべし、考ふべきなり。

弓の張顔

張顔とは弦を張りたる弓の形をいふなり。弓は張顔に依りて用途を異にせりと敎へ來れり。卽ち弛下の少し强きを指矢顔といひて繰矢、指矢に用ひ、弛强きを射拔物に用ひ、弛の上下及び弛とも形よきを的前、卷藁に用ふ。

矢の根

矢の根は矢じりとも矢さきともいふ。之れ征矢などにいふことにして、的矢の根は板附(平題とも書す)といふ。篦の損ぜざる迄に嵌用するものにして、板附といひたるは、矢取の運ぶ器の底に張れる板を突くといふより名づけたるなりといへり。椎の實は賭的射に用ふるものと知るべし。

相生、相尅

相生とは弓、矢、弦の相應(釣合よき)せるものを用ふる事なり。相尅とは弓、矢、弦の不相應(不釣合)なるものを用ふることをいふ。喩へば弱弓に重き矢、太き弦、强弓に輕き矢細き弦の如く相應せざるものは之れを相尅といふなり。

五重十文字

弓矢に就て十文字となるべき處五ヶ所ありと云ふ事なり。一に弓と矢、二に手の裏と弓、三に懸の大指と弦、四に胴の骨と肩の骨、五に首の骨と矢なり。是れ五ヶ所の十文字なりとす。

其二　強弱と弓手、馬手

三つの強弱

弓を引く上に於て強弱の最も注意すべき所三ケ所あるをいふ。卽ち一に手の裏の強弱をいひ、二に身の曲尺直なる強弱をいひ、三に抱の強弱をいひて、此の三ケ所は大事の強弱なりと云ふ。

一騎當千

馬手(或は勝手とも云ふ)は弱みを嫌ふを以て常に一騎當千の兵の如く強かれと云ふことなり。腕首にて引かずして肩と肘にて引き來り強みを保つべきなり。

大將

馬手を兵にたとへ弓手を大將にたとへたり。馬手が一騎當千の兵の如く強け

れば從つて弓手は大將の如く強かるべく、又大將と兵と心を協せざれば勝利を得ること能はじとの意を寓し、弓手、馬手の關係の緊切なるをいへるなり。

其三　手の裏

手の裏とは弓の握り方と其の應用とをいふなり。弓を握るには拇指、中指、藥指、小指の四指共に餘りに強く握らずして、拇指と人差指との間にて弓を押懸くるやうにすべし。畢竟、弓は握るといふよりも寧ろ常に押すやうに心得べきなり。平押となり、握り替へる等の癖は大抵此の心得の相違より生ずるものなり。而して手の裏は人によりて異るものなれども、古來大別して鵜首、鷙中、三毒、骨法、呼立の五つとなせり。此の手の裏の力を持たしめんため我が力を加へて腕首にて押掛けたるを吾加といひ來れり。吾が力を加ふるの謂なるべし。而して鵜首とは弓手の拇指、屈曲して指頭、下向きとなるをいふ。鵜首過

ぎたるは弱しとへいり。鷙中とは掌中に卵を納めたる如くに弓を持つ手の裏なり。されば鷙中は卵中と書きたるもあり。三毒とは藥指と小指との二指をしめて大指の脇にて弓を押しかけたる手の裏なり。骨法とは總てゆるみなく法に叶ひて骨筋の定まる所をいひ、射法の定法とする根本の手の裏なり。呼立とは殊更に爲す所なく自然と出來上りたる間然する所なき至極の手の裏にして老成の手の裏ともいふべきなり。彼の嬰兒が歩まんとして初めて立ち上る時は無理なくうまく出來るものにして、其の自然なることは、傍にあるものをして思はず「ア、立つたり」と感歎せしむる如く誠に自然に無理なくよくかゝりたる手の裏をいふ。之れ等は前述の如く多年の修業、工夫の功を積みての事にして初めより能くすべきにあらず。而して又手の裏は最も微妙の働きある所にして、強く握るも惡く、緩かなるも惡く、約言すれば締りて緩みあるをよしとし、誠に修業、工夫のむづかしきものなりとす。吉田流(大藏派)弓法許(ゆるし)の書には手の裏

のことを記していふ「手の内は上下左右の眞中を握る上押は下明き下押は上くつろぎ前へ取出せばくじけ淺く取れば肩の張合弱き故五つの中分を取るなり十文字に心得てよし弓をしかと強く握りて其の儘少し和らかにすれば手の内丸くなり指共何れもしまりよし締めて緩める心持なり」と。之れ說き得て解し易きを以て前說と併せ考ふべきなり。

手の裏は前述の如くにして射前の善惡も的中の良否も離の時に於ける手の裏にて定まるもの多きを以て、弓術を學ぶ者は常に能く〳〵工夫して修業すべきなり。

其四　狙(ねらひ)と的

雪の目付

雪の目付とは降る雪を借り來りて的の見方を敎へたる言葉にして誠に優美な

る語なり。即ち卍巴とふりしきる雪と雖も其の中の一つに眼を付けなば、數知れぬ多くの雪片も邪魔にならずして目を付けたる雪の一片だけ見ゆるものなり。的を見るにも之れと同じく的の全體を見ずして常に目をつくべき處なる中心の「錐もみ」の穴のみを見ることを修業すべしといふことなり。

一分三界

三界とは佛語を引き當てたる言葉にして的の全體を三界と稱するなり。一分とは的の中心即ち眞の星にして「錐もみ」の穴のある所をいふなり。弓を引くとき此の一分といへる眞の星に志して目當を定めなば、三界(的全體)に違ふまじとの意なりといひ傳へたり。要するに迷は心の障りより起る所にして洵に除去し難きものなれども、常に成るべく之れを去る事に努むべきなり。畢竟、的を見て迷ひを起す心にては眞の中りは得難きを以つて平素に於てよく〳〵修養すべきなり。

著己著界

之れ亦前説に似たるものにて的を見る心の扱ひ方をいふなり。著己とは己の心を的に引著けられずして却て何間かの先にある的の星を弓手の先に移し來りて己に引著くるをいふ。畢竟、心氣悠々として的に執着せず的を大きく見るの心を持つべきなり。著界とは之に反して己が心の的に引著けらるゝをいふ。當て氣のある時などは多くは此の狀態にあるものなり。射手は常によく考へて心を練り、此の著己と云ふ處につきて修業すべきなり。

拳中と心眼

拳中と心眼とは是れ亦的に對する心の扱ひ方にして大和流などにいふ事にして大略前説に同じきものなり。拳中とは如何なる事なるかといへば、弓を執りて立つ時十五間先きに的ありと思うては心得違ふなり。故に拳中といふ名目を置けり。即ち的を拳に移しとるといふ事にして、十五間先きの的をねらひては

遠きが故に氣を以つて的をつなぎ拳の上に引附け、序の位（的を射る位にして氣を練りユッタリと保ち滿たしむるの意なり）にて氣を練り心を凝らして射るなり。此の如く術至らば百發、百中疑なしと說けり。

心眼とは「約束の處まで引込みぢり〳〵と延合ふ時目當（即ち的）を氣にて引取り懸へ移し留め、其の懸にて目當へ釣合ひたる處則心眼なり是れ眼を以て見るにあらず心を以て見るの術にして大切の處なり中々得難き術なり動きある物などを射るには尙更用る目當なり謹んで學ぶべし」と說けり。

以上の拳中と心眼は言葉は變れども其の意は著己に同じきものにて、何派にても之れを大事とするは少しも異る所なきなり。

的の視方

的の視方の肝要なるは言ふ迄もなき事にして前述の如くなれども、初學の人々は往々、弓の力のために己の精力を殺がれ、從つて的を視ることを忽せにすることあり。又的を見んと欲しても見る能はざることあり。之れ最も戒愼すべきことなり。而して的の視方は右の眼にて弓の左方左拳の上より見るべくして、左の眼は唯添ふるのみにて視力を使はぬやうにせば、的は自ら明快なるべし。之れ初めは困難のことなれども、此の如くにして漸次修業を積まば遂には爲し得ることなりとす。而して又心と眼とは必ず關聯すべき者にして、心先づ的に赴きて眼之れに從ふものなれば、眼若し注視を怠る時は心も既に弛みを生じたる時なれば的を見るの眼は始より終まで決して他に移すべからず。故に古來前述の如く、雪の目付、一分三界、著己著界、拳中等の語を設けて、種々に之れを戒め、射法本記にも第一に視術、目術の項を設けて的を見ること及び眼の働きを練習せよと說きたり。其の大要を記すれば卽ち「視方は右を以て正とし左は之に從ひ心氣を靜かに定めて視る時は的を見て明白快然たるべし又目の使ひ方は意を正

淳に安んじて的に心を奪はれず瞬する事無くして目を瞪るべし」といへり。列子湯問篇にも「爾不瞬を學んで而して後射をいふべし」との語あり。之れ瞬する事あらば一旦見定めたる的も明瞭を缺きて、且、己の意を殺がるゝことあればなり。射學正宗にも亦審法（的を見るの法）を第一に置きたり。的を見る事は斯の如く肝要なるものなれば努めて學ばざるべからず。彼の卷藁に對して射る時は立派なる射方なるも、的に向ひて射方の頽るゝは主として的に對する眼と心の修養との如何によること多し。弓術を學ぶものは意を此に致し修養を怠るべからざるなり。

心の狙

的を視、的を狙ふ法は前數項に述べたるが如くなれども狙ひ方の歸著する所は心の狙なり。心の狙とは其の字に示す如く物の一度、眼睛に映ずるあれば其の大小、距離等の要點はおのづから明瞭に心に傳はり、心に會得するを云ふ。

斯くの如くなれば的に心を奪はるゝ事なきは勿論なりと雖も是れ初學者の成し得る業にあらず。多年孜々として怠らず練習、研究の功を積みて初めて此の境に到達すべきものなるのみならず、何人も必ずしも成し得べき事にあらずして所謂以心傳心的の事なり。弓術を研究するものは意を練り、思を潛め、工夫を凝らし、此の境に到らん事を勉むべきなり。

其四　弓術の三要素

弓術の修業に關しては以上述べたる所によりて其の術を修むるの方法と理論とを知るを得べきを以て、之れによりて岐路に彷徨する事なく、其の技を磨き、其の理を會得すると共に精神を修養せば其の進歩の見るべきものあるべし。されども其の人によりては或は技術のみに趨りて理論を外にし、或は理論のみを事として技術を疎んじ、或は之れを兼修するに勉むと雖も精神の修養は措いて

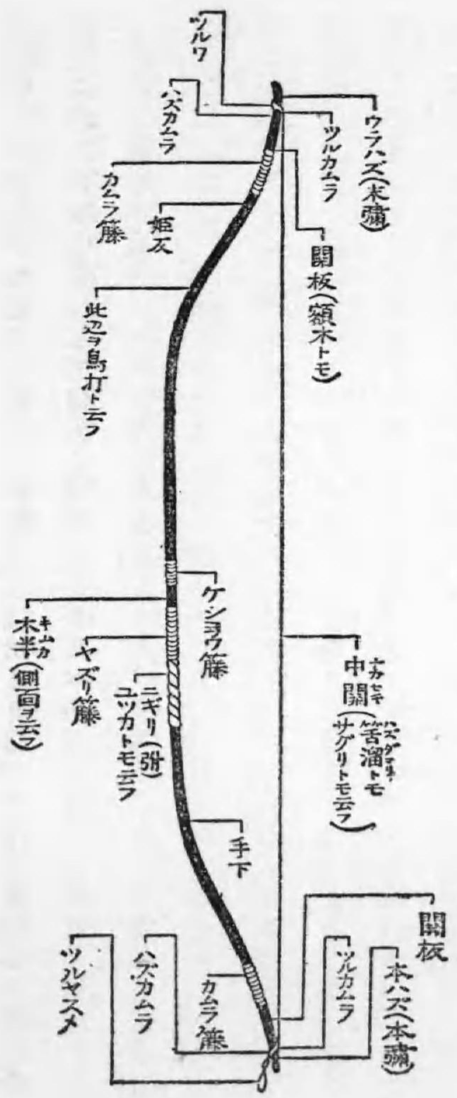
問はざるものあり。此の如きは弓術を學ぶ者の爲に誠に惜むべき事なるを以て重複を顧みず此處に之れを說く所以なり。畢竟、技術、理論、精神の三者は恰も鼎の足の如く弓術修業の三大要素にして、其の一を缺きても完全に弓術を學びたりといふを得ざるものなれば、宜しく技術を練磨すると共に其の理を考究し、同時に精神の修養を怠るべからざるなり。數年弓術を學びたる人にして、其の人の常に口にする理論の半ばにも手腕の働かざるものあるは、一は其の人の性狀によりて已むを得ざるものあるべしと雖も、日常、此の三者を並行修業するを勉めざりしに基因したるもの少からざるべし。之れ卽ち初學の人の深く腦裏に印し行住、坐臥忘るべからざる事なりとす。

精神の修養は宜しく古來の弓術上の敎より心氣を鍛錬して其の向上を努むべしと雖も、或は先哲の言語に鑑み、若くは古人の行動に顧みて修養、工夫の功を積み、以て品位を養はざるべからず。彼の鐵面皮を以て大膽と思ひ、驕慢を以て自信と誤り、大悟を標榜して野狐禪と嗤はるゝの類は往々見聞する所、之れ自ら省みざるの罪にして何人も深く戒めざるべからず。

第四章　用　具

其一　弓

弓の所々に名あり、之れを弓の名どころといふ。其の大要は左圖の如し。



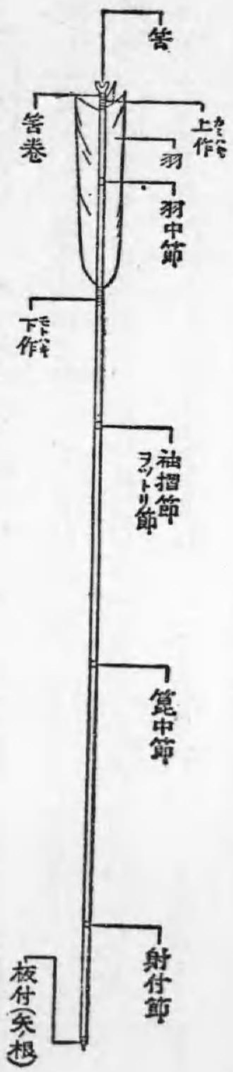
弓の幹を「ホコ」といふ、昔よりの名なり。中央を弭といふ、或は弓弛とも書く。此處を「ユミヅカ」「ユヅカ」といふは古き名なり。内側を内竹又は前竹といひ、外側を外竹といふ。弓の兩端を弦といふ、即ちユハヅにして下なるを本弦と稱し上なるを末弦と呼ぶ。弦の字は古來或は弦と書き或は弦とも書けり。

古昔弓を「ミトラシ」といひ、轉じて「ミタラシ」といひたり。之れ天子の御手に執らるゝ御弓なれば斯くいへるなり。而して又弓矢を調度といひたり。調度とは道具といふ事なり、之れ武士の第一の道具となしたるが故なり。

弓の製作は上古にありては木にて作れり。丸木弓といふもの之れなり。其の材は檀、梓、槻、櫨、柘等を用ゐたり。中古より蒔繪の弓、重籐、塗籠籐其の他種々の弓を製するに至れり。重籐は將帥の用ふるものにして、塗籠籐は士卒之れを用ゐ、蒔繪の弓は儀仗の用たり。今の白木弓は近世の製作に成りしものなり。

其二　矢

矢にも所々に名あり、是れ亦矢の名どころといふ。大要左の如し。



矢の幹を篭といひ又簳といふ。矢によりては矢茎ともいふ。

羽の名稱は走り羽、弓すり羽、外がけ羽といふ。走り羽は又、やり羽といふ。

甲矢、乙矢とは一手（二本）の的矢をいふなり。四本の矢を一組といひ、二手の矢を組合せたるなり。甲矢とは矢を弓に番へて羽表が外方に向くを云ひ、乙矢とは羽表が内方に向くを云ふ。甲矢は或は兄矢、早矢とも書き、乙矢は弟矢、遲矢とも書く。

矢は多く篠にて作る。古昔は柳條を用ゐし事あり。鏃は上古は石或は獸骨を用ゐしが後に至りて專ら鐵を用ゐたり。羽は鷲、鷹、鶴、鵠等を用ふれども、就中、鷲の一種なる大鳥及び熊鷹を尊ぶ。笹は獸骨又は竹を用ゐ、儀仗の具には水晶を用ゐしものあり。

矢の長さは古來「手ばかり尺」（中指を折りて下につけ人差指、拇指を開きたる長さを五寸となすをいふ）の二尺七寸五分を以て常規となせりといひ、或は其の人の十二束（一束とは四本の指の幅をいふ）を極度となすともいふ。二ッ伏、三ッ伏などいふは二本、三本の指の幅をいふものにして一束に足らざるなり。今は人によりて異れども三尺以内の矢を用ふるもの多し。

矢の製作も中古に至りて漸次巧妙となり種類從つて多しと雖も大別すれば征矢、獵矢なり。又儀仗の矢、的矢あり。征箭は軍陣に用ゐられ、鏑矢等も之れ

に屬す。獵箭は或は野矢ともいひ山野狩獵の用に供せらる。

羽に石打、切生、中白、妻白、中黑、妻黑、其の他種々の名稱ありて、是れ等の羽にて作ぎたる矢を石打の征箭、何々の征箭などと稱せり。雁俣、鋒矢、蟇目、四目、神頭の矢等の名あるは鏃によりて名づけたるなり。

其三　韝

韝は數種ありて常に用ふる所のものは柔帽子韝、半固帽子韝、固帽子韝にして、初學者は柔帽子より始め、技倆の進むに從ひ半固を用ゐ、更に固帽子を用ふるを順序とす。固帽子に三つ韝、四つ韝あり。古來免許の門人には四つ韝の藥指を紫革となすを師より許したるものなり。此の外、騎射の韝に叉韝あり、一具韝とも稱し、五本の指をつゝむものにして、左右の手に之れを著くるものにして、本式の韝にして古代の韝は皆此の制なり。

第五章　來歷と射術

其一　弓術の由來

武を以て國を建てたる我が國にありては、弓矢の尊重せられたる事甚だ古し。神代の事は邈焉として稽ふべからずと雖も、弓矢は既に開闢の時代より樞要の具として傳はり來れる事は古史に徵して明かなる所なりとす。卽ち天照大神が須佐男命に見え給ふ時千入五百入の靫をつけ、伊都の竹鞆を著け、弓彌を振り起て給ひたるより、其の後、葦原中國を平げしめんとして天稚彥の天鹿兒弓、天羽々矢を賜ひて不逞を征せられんとせし事、天忍日命は天波士弓、天眞鹿兒矢を持たれたる事も古記に見えたり。下りて人代に至りては、神武天皇東征の時に於ても唯一の武器とせられ、長髓彥を擊たせらるゝ時金色の靈鵄飛來り

て天皇の弓に止まりたる祥瑞あり。又垂仁天皇の皇子が皇位を求めずして弓矢を得ん事を望まれ、仁德天皇十二年八月には盾人宿禰が高麗より獻じたる鐵的を射徹して其の使者を驚かしたる等の事は、史に見ゆる顯著なる事なりとす。其の後、清寧天皇四年九月には天皇射殿に幸して百寮及び海表の使者に詔して射をなさしめ、孝德天皇三年にも亦朝廷に射の事あり。天智天皇の九年正月には宮門内に大射を催され、其の後天武、持統、元明、聖武諸帝の御代は云ふに及ばず、平安朝に入りてよりも代々の天皇或は臨幸せられ或は詔勅を下して、豐樂院、武德殿若くは宮殿内にて射禮、睹射、騎射、弓場始等の射を行はせられ、以て親王以下公卿百僚の射藝を試みらる。伴宿禰武多麻呂(大同の頃)紀朝臣眞道(弘仁の頃)が射禮の宮儀に名ありしも此の際なり。文名を以て當時に鳴りし菅原道眞が射を善くして並居し人々を驚かしたるも亦此の間の事なりとす。殊に仁明天皇承和元年二月及び村上天皇天曆元年十一月には天皇親射の事さへ

ありたり。又延喜式には諸衞の人士を採用するに步射、騎射を試みられ、或は諸國每郡に射田を置きて射藝を奬勵せられたり。前九年の役、後三年の役に至りては源家相承の武藝を以てして、賴義、義家父子相踵ぎて弓馬に盛名を馳せたり。是れより以後に迨びては殊に須要の武具となり、弓矢を操りて名譽を得たる人々も少からず。源爲朝が一矢、戰艦を覆したる、梶原景季が梅花を箙に挿みたる、若くは那須與一宗高が一箭、扇を射留めたる等の事蹟に徵しても其の盛んなるを知るを得べし。源賴朝、天下の權を掌握するに至りては、一度衰へたりし射禮の古儀を復興し、屢〻射藝に堪能なる麾下の士を集めて奬勵したるは東鑑にも見ゆる所なり。後醍醐天皇の朝には新羅三郎の遠裔なる小笠原貞宗ありて、祖先よりの弓馬の藝を傳へ、常に參内して馬を丹墀に調し、射を金門に試みたりといふ。勅に曰ふ「天下弓馬の俊傑なるもの貞宗あり」と、乃ち天下の師範とせらる。是れを小笠流の祖となし、足利尊氏以後に於ても子孫相

承けて室町將軍の師範となり、以て德川氏に及びしなり。足利義滿の時に在りては今川氏頼、伊勢滿忠、小笠原長秀等に命じて弓馬の故實、禮式を考覈、撰修せしめらる。之れを三議一統と稱し來れり。應永の頃に在りては伊賀に日置(へき)彌左衞門範次あり、其の後明應の頃に在りては大和の日置彈正正次(或は政次)あり、日置流之れより出づ。正次後に薙髪して瑠璃光坊威德(或は以德)と稱し、諸國を遍歷して庶民に射藝を奬勵し弓術中興の祖と仰がる。鐵砲の我が國に舶來したるは此の頃の事なり。即ち天文十二年種子島へ舶來して漸次全國へ擴り、武器に一變遷を來したれども、武藝としての弓術は猶、重視せられたり。而して日置彈正正次は江州の住人、吉田上野介重賢(號道寶)に傳ふ。其の子出雲守重政(號一鷗)大いに家聲を揚げて吉田流と稱し、岐れて出雲派、雪荷(せつか)派、左近右衞門派、大藏(おほくら)派、印西(いんさい)派、大心派、壽德派、道雪(だうせつ)派、山科派、松本派となり、別に日置の門より針野派、大塚派、淵上派(此の三派今傳はらず)等出で、吉田

重賢は針野加賀守より、中り拳の術を傳授せられたりと云ひ傳ふ。又日置範次よりは安松左近吉次、弓削甚左衞門正次、其の子彌六郎に傳へて、竹林(ちくりん)派を生ずるに至れり。石堂竹林坊如成(天正年間に卒す)其の祖たり。竹林派も亦岐れて正統竹林派、尾州竹林派、紀州竹林派となれり。此の外太子流は聖德太子を祖となすと稱へ、大和流は森川香山(寛文の頃の人)を中興の祖とせり。要するに近古德川時代に於ける弓術は此の如く多流、多派にして旺盛なりしなり。是れ一面には大的御上覽、三十三間堂通し矢等ありて弓術を奬勵し、德川麾下の士は勿論諸藩の士も亦爭ひて切磋、琢磨の功を積み、以て其の技を競ひしに由れり。

大的御上覽とは德川將軍が射藝を御覽ぜらるゝを云ふものにして、其の始は三代將軍家光の時、寛永十四年の秋、御城內西丸山里御庭にて催されたるに起り、四代將軍家綱の時には明暦二年四月廿三日二の丸にて上覽あり、其の後代々催されしが、八代將軍吉宗の時に至りては誠に武藝を奬勵せられ、享保十二年

七月廿一日吹上御庭にて大的の上覽ありしより以後は毎年連綿として此の事を行はれ、大いに射藝の隆盛を見たり。十一代將軍家齊の時に至りては、文政十年九月廿三日高田馬場へ御成ありて堅物射をも上覽ありしが、文久二年閏八月廿九日射場始其の他總て弓術上覽を廢せられたり。

京都三十三間堂通し矢の起原は、保元の頃紀州熊野山蕪坂の生れなる源太といふもの小き根矢にて差矢に射たりしことあり、其の後文祿の頃に至りて東山今熊野觀音の別當栫坊が八坂の青塚を射ての歸るさに折々此の堂にて休息し繰矢を射たるに始まり、慶長十一年正月十九日石堂竹林の弟子、淺岡平兵衛といふ者五十一筋を通したるより以後、通矢の數多きを誇るに至り、年を逐うて益々隆盛に赴き、通矢の數の前人を凌ぐものは弓の天下總一と稱して當代に名聲を馳せたる士も少からず、就中、尾州竹林派の星野勘左衞門は、寛文九年五月一日暮前より翌二日午の刻迄に一萬五百四十二筋の内、八千筋を通し、紀州竹林派の和佐大八は其の後、貞享四年四月十六日（晝夜兼行）總矢數一萬三千餘の内、通し矢八千百三十三筋を算して日本一と稱せり。而して此の通矢の種類に百射、千射、日矢數、大矢數等あり、又半堂などをも射たり。

江戸の三十三間堂は上野寛永寺の開山、慈眼大師の發起にて江戸の弓師、備後といふもの官の許を得て諸家に勸進し京都の蓮華王院三十三間堂を模して建立す。始め淺草にありしが元祿年中燒失せしを以て深川、富岡八幡の二町許東の方へ移されたり。此の堂は正保、慶安の頃より京都の三十三間堂の如く弓術の競技場となり近代までの記錄を存す。其の盛思ふべし。此の堂に於ては、正保三年四月十四日阿部豐後守の家臣海野二左衞門、根矢千五十筋を射て其の中二百五十三筋を通し天下一と稱す、是れ根矢を以てせし始祖なりと云ふ。

其二一　弓術の流派

古昔に於いては何流、何派と稱したる事なきが如し。大同頃に伴宿禰武多麿あり、弘仁頃に紀朝臣眞道ありて兩家に射禮の容儀を傳へたるを以て、之れを古昔の弓術の流派の如く伴流、紀流など唱ふれど、之れ後世名づけたるものにして當時にありては何流と稱したるものにあらざるべし。殊に是れ等は射禮を主とせるものにして射術を主とせるものにあらざるが故に射禮の祖といふべくして射術の祖とはいふを得ざるなり。其の後右大臣能有公（文德天皇の御子）弓馬の藝に達し給ひて有名なりしが、其の法を婿君貞純親王に傳へ、其の子六孫王經基相承けて源家の基を開き弓馬の道は終に源家累世の業となり、頼義、義家、爲朝に至りて名聲益々高し。源頼朝、幕府を鎌倉に開きてよりは、其の麾下の士中に在りて弓馬に堪能なるもの十數人を撰びて常に射藝を試み、降りて後醍醐天皇の朝には小笠原貞宗、弓馬の師範となりしと雖も、何れも未だ流派の稱あらざりしなり。されば小笠原流といひ、武田流といひ、若くは日置流と稱し、流

派を以て呼びたるの始は其の時代明瞭ならざれども、思ふに皆是れ足利時代末期よりの名目なるべし。殊に日置流の起りて以來、名士輩出し、各自工夫、研究を重ね、自らその門派を張るの必要より流派の數漸次に多きを加へ、何流といひ、何派と稱し、頡頏するに至りしなり。德川時代寛文頃の森川香山の大和流の書に九流とて鹿島流、逸見流、武田流、小笠原流、日置流、安松流、弓削流、吉田流、大和流を、七派とて竹林派、雪荷派、印西派、道雪派、左近衞門派、大藏派、壽德派を擧げたり。この外太子流、山科派、大心派などは記載に洩れたり。

或は又我が國傳來の弓術なればとて日本流と號し、又神道流、尊流と記したるものあり。或は天神より武甕槌命に傳授の弓一に歸し、鹿島流といふ。鹿島の禰宜四郎なるもの鹿島流を相承して逸見清光に傳へ逸見流といふ。逸見家より日置氏に傳授すと記せるものあれども今容易に其の是非を知るを得ざるなり。

其三　歩射と騎射

射術を分ちて二とす、即ち歩射と騎射なり。現時行ふところの的射は歩射に屬するものなり。今其の大要を錄すれば、歩射は「カチユミ」又は「カチダチ」といひ、古昔朝廷にて行はれたる射禮、睹弓、弓場始、若くは鎌倉時代以後、幕府に於て行はれたる弓始、弓場始等皆是れなり。的の種類よりいへば大的、小的、草鹿、圓物等歩射に屬す。騎射は「ウマユミ」といひ、古昔朝廷の騎射に始まり、幕府の流鏑馬、犬追物、笠懸等之れに屬せり。古來、大的、草鹿、圓物を歩射の三つ物と稱し、流鏑馬、犬追物、笠懸を騎射の三つ物と呼びたり。

其四　五射、六科と眞行草

弓術家の必ず修業、研究すべき項目として古より五射、六科といふ事を謂へ

り。五射とは射術に關する五つの科目ある事をいひ、六科とは弓術に關し弓術家の知らざるべからざる六つの科目ありといふ事なり。即ち五射とは一は卷藁前にて卷藁の射法なり、二は的前にして的に中つるの射法なり、三は遠矢前にして野外に於て成るべく遠くへ箭を送るの射法をいひ、繰矢前ともいふなり、四は指矢前にして數百の矢も上下左右の偏なく數十弓の遠くを射るの射法をいひ堂前等の射之れなり、五は要前といひ陣中戰場の射法をいふ一に之れを軍射前ともいふなり。六科とは一は射術にして前に述べたる五射を能くするをいひ、二は射儀にして卷藁、的を始め弓を射る時の禮儀にして進退、作法を能くするをいふ、三は弓法と稱し克く弓矢を取扱ふの法をいふ、禮儀を正しくし取扱を能くせざれば長幼の次序を明かにし射法の善美を盡す能はざればなり、四は弓器にして弓矢の種類、制式、箙、空穗等の器具を知悉するをいふ、五は弓矢の製作と利害、得失を研究して能く之れを知るをいふ、六は弓道にして神代相承

の祕訣、引目、鳴弦其の他の理を究むるをいふなり。

射方によりて三つ物、眞行草などと古より名づけたることあり。卽ち古來卷藁前、的前、指矢前を射形の三つ物といひ、眞行草とは卷藁前、的前を眞といひ、要前、遠矢前を行といひ、指矢前、堂前を草といひ、或は之れを眞行草の三つ物ともいふ。

以上は古より云ひ傳へ來りし事にして、悉く之れを學び之れを知り之れを能くするは寔に容易の業にあらずと雖も弓術家たる者は勉めざるべからざるなり。

竹林射法大意の終に

屋代鈇三氏は明治二年十月二十九日、靜岡縣有渡郡馬淵村に生れられた。明治二十三年から東京美術學校に奉職されて、大正九年に死なれるまで三十一年間勤續された。

弓術を始められたのはいつ頃の事か不明であるが、本多利實先生から日置流竹林派の印可を授けられたのが明治三十七年の四月である。その時分から美術學校の弓道部のためには大いに盡力されて、本多先生の助手をもやつて居られた。

大正六年十月、本多利實先生が逝去されたので、美術學校弓道師範となられたのみならず、東京帝國大學の師範をも兼ねられた。翌大正七年學習院が弓術を正科として課するやうになつたので、その最初の師範となられた。

大正九年七月二十日病死せられ、麻布區今井町九番地善學寺に埋葬された。法號は諦善院眞與至道欽三居士である。

屋代氏の竹林射術に於ける造詣の極めて深かつた事は、本多先生から印可を得られた事で明かであるが、後進の敎導には特に熱心で且懇切であつた。

「竹林射法大意」は大正八年の著作にかゝるもので、大正九年初夏、病氣が重くなつて、再起の見込なきことを自覺され、弓友故橋元巳吉、高木棐の二君及び私に遺言され、死後出版して貰ひたいとの希望であつたので、大正十一年生弓會で七百部印刷した。その後昭和五年再版、二千部を印刷したが、已に頒布し盡したので、今回第三版、二千部を印刷することにした。

昭和十三年十月

辱知　碧海康溫識

昭和十三年十一月十五日　第三版印刷
昭和十三年十一月二十日　第三版發行
（第三版　二千部印刷）

〔竹林射法大意〕
（金五十錢）

著者　故屋代欽三
發行者　碧海康溫　東京市小石川區小日向臺町二ノ五番地
印刷者　吉原良三　東京市牛込區早稻田鶴巻町一〇七番地
印刷所　株式會社康文社印刷所　東京市牛込區早稻田鶴巻町一〇七番地
發行所　社團法人生弓會　東京市豐島區西巢鴨四丁目二百四十七番地

不許複製

終